資料2－2

釧路市立阿寒中学校

（開校　昭和二十二年五月）

阿寒中学校は、昭和二十二年五月、呱々の声をあげた。

昭和二二年　五月　阿寒村立阿寒中学校開校
　　阿寒小学校四教室を借用し、三学級でスタート

「開校二十三周年記念誌」に初代校長柳谷賢三先生の「青年学校より中学校へ」という一文が載っている。

「前略）思えば敗戦のため人々の生活は困窮し、人心は荒れ果て、その日の生活に追われ将来のことなど考える余裕など無い状態であった。こんな折、新制中学校が発足したので、言わば無からの出発で何一つ拠りどころとて無く全く途方に暮れた。この時思い出したのが全国で立派な人々が育った学校や教育効果のよいといわれる学校を参観した時のことである。それらの学校の共通するところは、立派な記念樹林等が美林をなした。風致の整った校庭のあることであった。こんな時にＰＴＡが発足し、父母との話し合いの場が出来たのを機会にそのことを話したところ植林を勧められた。いやいやながら始めたが学校植林の教育上の論議をしているうちに病みつきになり、皆に迷惑をかけることになった。（後略）」

二四年　四月　旧校舎第一期工事完了
　　校章の制定
三〇年　　校歌制定
三二年　一月　町制施行により阿寒町立阿寒中学校と改称
　　四月　「鶴クラブ」誕生
三五年　五月　「鶴日記」発刊
　　一一月　文化財保護委員会より全国表彰を受ける
四〇年　四月　校訓「鶴・翔・青・雲」
四四年　四月　徹別中学校を統合
四五年　四月　吉川英治賞受賞
　　一〇月　現校舎落成、開校二十三年記念式典
平成　九年一一月　開校五十周年記念式典
　　一七年一〇月　三市町村合併により
　　釧路市立阿寒中学校と改称

校　訓

「鶴翔青雲」、大空を天高く、そして、力強く飛んでいく一群の鶴のように、大きな夢と希望と志をもち、現在、未来へ向かって羽ばたいていく生徒を育てることを目指す。

教育目標

◎青雲の大志を抱こう
◎不屈の情魂を燃やそう
◎磨かれた教養を身につけよう
◎たくましい体をつくろう

校章と校章の由来

制定：昭和二十四年中学校校舎新築の頃とされる
考察：当時の教員の合議による
校章の由来
阿寒中学校生徒の心の優しさを、六枚の花弁を持つ花で象徴し、故郷阿寒をＡ、Ｋの二文字で表している。
優しさの中に、風雪に耐え勤労を尊びたくましく生き抜く気概を六角形の雪の結晶で表現し、「阿中」を取り巻く円は、太陽の光とエネルギー、そして手をつなぎ共に発展することを期待している。

校歌の制定

校歌は昭和三十年に制定された。**木下　春影**作詞、**橋本　道博**作曲による楽曲である。

阿寒中学校といえば**「鶴の研究」**で一世を風靡した。昭和三十年から四十年代、果敢に取り組んだ生徒たちの活躍を振り返ってみたい。

『ツルクラブ』の誕生」、開校五十周年記念誌「鶴翔青雲」（七九頁）から抜粋する。

「昭和三十二年十月阿寒中学校に「ツルクラブ」が誕生した。その年の春に赴任した大井健次校長は、阿寒川対岸の学校植林地で植林を終えた帰り道、釧路湿原から飛んできたタンチョウを見た。秋の紅葉が始まった十月であった。学校までの道をタンチョウの保護と教育の中にタンチョウの生態研究を取り入れることはできないものだろうか、ということで頭がいっぱいだった。先生方にも相談した。生徒の意見も聞いてみた。答えは「ツルクラブ」を作ろうということだった。

沢出喜代志、畠山軍司、塩梅祥次の三人の先生がクラブを担当。三十六人のクラブ員が、タンチョウがよく来る十三地区を決めることから行動が開始された。十一月下旬になるとタンチョウは湿原から飛んで来始める。数も徐々に多くなってくる。特に多く飛来するのは、上阿寒地区で、一か所に十羽以上も見ることがしばしばだった。

観察記録「鶴の日記」も記入され、月日、時刻、天候、鶴の数（親、子）鶴の位置と鶴までの距離、鶴の様子などが書き込まれた。

その年の十二月五日に行われた「タンチョウ生息状況一斉調査」では、校下で六十六羽を確認した。この年の確認総数は九十二羽だっただけに、阿寒は一躍脚光を浴びて報道された。

「鶴の日記」にはいろいろなことが書かれた。「タンチョウは宵っ張りで朝寝坊だ。だから僕たちが野兎を捕まえるのにかけたワナを朝早く見回りに出かける頃にはツルは寝ている。たいてい群れをなして川の浅瀬に立っている。首はどこにあるのかわからないように、羽の下に入れているが、必ず見張りのツルが何羽かいて首をすっくり立てている」。記録を読んで、大井校長は本当にこんなことがあるのかと一斉調査の五日未明、舌辛川とチロッペ川の合流地点に行って見ると、実に四十羽ほどのツルが川の中に整然と片足立ちをしていた。朝もやの中のツルは幻想的であった。その後、大井校長は、数回その場に行ったが、四十羽とまとまったツルを見ることはできなかった」

こうして始まった「ツルクラブ」の活動は徐々に成果を挙げていく。

昭和三十三年五月には、丹頂の愛護校として道知事の表彰を受ける。そして、十一月「ツルの日記」を発表し、三十九年十二月には「日本の鶴」を発刊、全国に知られることになる。さらに、昭和四十四年には、教育出版社国語教科書に「ツルの日記」から登載され、四十五年には「第四回吉川英治賞」を受賞するなど輝かしい教育実践上の成果を挙げた。また、多くのマスメデアに取り上げられて全国に「阿寒中学校あり」の名声を博した。

ところで。前述の観察日記をまとめた「日本の鶴」の中に、生徒が鶴を題材にした幾つかの詩がある。次はその一つである。

「タンチョウ」　ツルクラブ員　三C　川田京子

雪の中に　凍りつく吹雪の中に　声をたがいに確かめあって
タンチョウは生きている
雪の中に　キラキラ光る雪野原に　その姿ほこらしげに
タンチョウは躍っている
雪の中に　夕やけにそまる地平線に　声を上げて
タンチョウは歌っている
春は近い　けがれない雪原をタンチョウは
歌う　踊る　はねる　鳴く　走る
今日という日を生きて　明日という日を喜んで
歌う　踊る　はねる　鳴く　走る　雪の中に
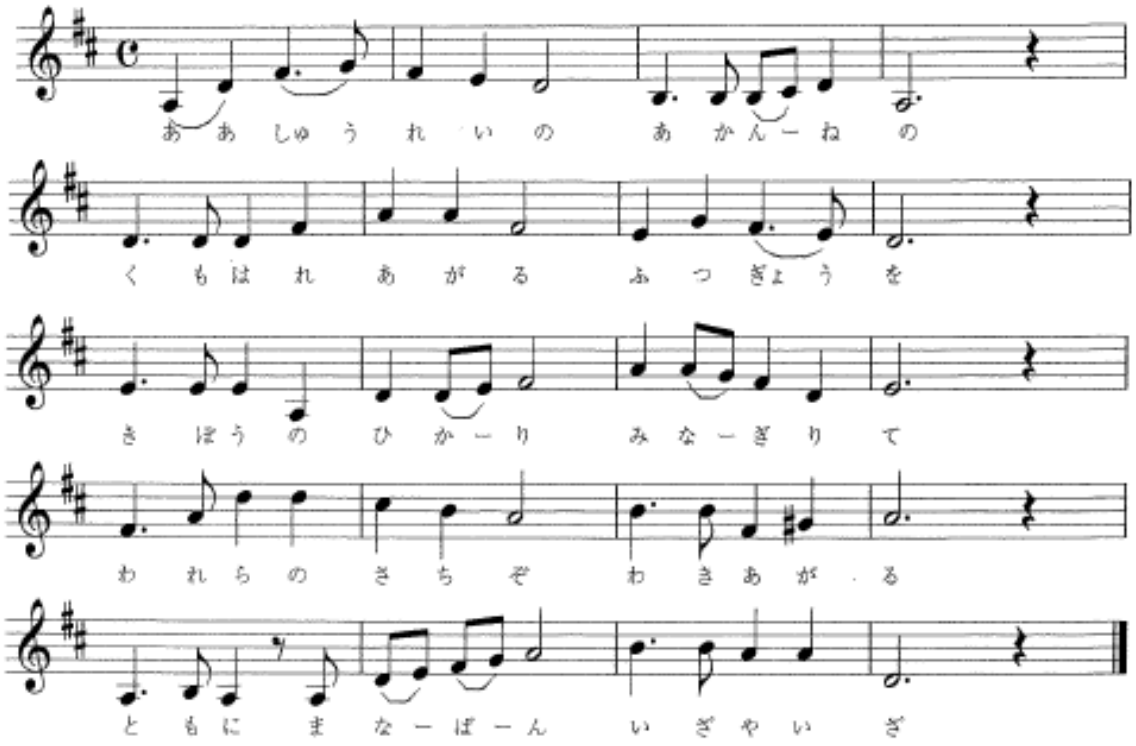
この詩を作った川田京子さんは阿寒高校に進学したが、二年生の春、マリモ国道で交通事故のため短い人生を終えた。美しい、優しい心の人だったと友人は言う。

（阿寒町史、八三三頁）

参考資料　開校五十周年記念誌「鶴翔青雲」（平成九年十一月）

阿寒中学校 校歌

木下春彰　作詞
橋本道博　作曲



阿寒中学校校歌

一

ああ秀麗の阿寒嶺の
雲はれ上がる払暁を
希望の光みなぎりて
われらの幸ぞ湧き上がる
共に学ばんいざやいざ

二

ああ清冽の阿寒川
愛の恵みをたたえつつ
望みは続く悠久に
われらの幸ぞ尽くるなし
共に学ばんいざやいざ

三

ああ端麗の鶴の舞
千古の姿美わしく
希望の歌に舞いつづく
われらの幸ぞ祝うらん
共に学ばんいざやいざ